文化結社トカラ塾 第14回「ナオの南風語り」
配布資料

離散と連続のあいだ：島を記述することの現在について

作成者：橋爪太作（東京大学大学院）

1. 近代における社会記述の2つの文体

- 経験論、功利主義、合理的選択理論（RCT）等

個人の自然な性向（個体利益の最大化など）が自由に発動された結果としての社会

- 観念論、制度論、文化相対主義等

個人の営為を可能にするア・プリオリな諸条件としての社会

⇒もちろん、この対比はかなりデフォルメされたものである[1]。

「個人の自由な要求の解放は、結局『万人の万人に対する戦い』になるのではないか？　さもなくば『自由』な個人は当人にとっては『自然』にしか見えない制度に貫かれているのではないか？」

とか、

「ア・プリオリな諸条件自体が神ならぬ人の創りしモノであるとするなら、それは歴史のどこかで発生した、その限りで経験的なものではないか？」

など、幾つかの疑問が容易に思いつく。

- 神の法か混沌か

動物たちや野蛮人たちからわれわれを隔てているわれわれの共同体、しかしそれはあくまでこの世において生起したものだとするならば、その上に展開される社会記述の文体は、経験的なものと絶対的なものの間にいかんともしがたい断絶を抱え込むことになる。

結局、われわれの混沌とした諸営為の調停者としての神をもう一度招き入れるか、あるいは主体としてのわれわれ自身を神にするしかない。

前者：方法論的全体主義（コント、デュルケームなど19世紀の社会学）、機能－構造主義的社会システム理論、文化相対主義

～文化なり社会なりを主語とした文体[2]

後者：ホモ・エコノミクス、実存的投企、社会構築主義

～個人ないしは個人の類比で扱われる社会的諸力とその未来への意思を主語とした文体

---

[1] たとえば観念論の親玉であるカントの批判哲学における、経験的なものでも理念的なものでも割り切れない「構想力」なるナゾの力をどう考えるか？　とか。

[2] この場合、たとえ複数の共同体とその神々を認めたとしても、それを縦に並べる（社会進化論）か横に並べる（文化相対主義）かの違いであり、個人に対して超越的な主体としての文化や社会という大前提は変わっていない。

2. 南島学の諸問題

明治以降、半ば歴史の偶然から日本という国民国家の領域内に編入された内なる異域としての沖縄、そして南西弧の島々に対して、あるときはあからさまに政治的な糸を持って、またあるときは学問的・文化的に「本土」との連続あるいは分断を語る言葉が作り出されてきた。

民俗学、人類学、歴史学、沖縄学、南島文学……これら南島諸学のもつある種の奇妙さと政治性については、すでに「南島イデオロギー」という視角から(いささかしつこいまでに)究明されている。南西弧の島々を「日本(ヤマト)」や「琉球(ナハ)」といった観念的な消失点からの遠近法[3]で考えること(日本文化の古層/琉球王国の発展と拡大)自体のあやうさ、相対性をはっきり言葉にしてくれたという点で、南島イデオロギー論は一定の役割を果たしたと言えるだろう。

だが、「(真の)南島を語る権利は誰にあるのか?」という問いは、実体化された「文化」神の祭祀権をめぐる重苦しい神学闘争へとなだれ込みはしないだろうか。

一方、社会科学において島を語る文体として、家族制度や祭祀組織、生業構造といったサブ・システムから島という一つの社会システムの存立を解明するという機能-構造主義が支配的であった。これは、見出された個々のサブ・システムをどのような系譜の上に置くかという二次的な問題をさしおけば、島を不在の消失点によって宙吊りにする南島イデオロギー的な文体からは逃れているように見える。

しかし、個々の機能の最終的な宛先である全体社会システムの構造が、およそ社会と呼べるものなら必ず備えていなければならないとされる幾つかの普遍的機能与件によって定義付けられており、しかもそれが社会の全体性を観察者たる社会学者が先取りするような境界維持システムの概念と結びついたとき、無意識のうちに陸地と海、人間と動物、現世と異界の間に境界線を引いてしまう思考によって、海の彼方や天上の他界も波濤を超えた交易も全て、一つの島社会に生きる人々が普遍的な必要に応じて創りだしたものとなる。

⇒島という単位性を保証するのが文化にしろ社会にしろ、それが常に目指されるべき全体を先取りする(A=Aである)という同一性の原理において思考される限り、島はどこまでも互酬の必要性や神々の法によって律された監獄や収容所に似たものにならざるを得ない。

断っておくと、これまでの諸研究が全く間違っていたとか、色メガネのせいで現実の島を見ていなかったなどと言いたいのではない。それは、イデオロギー/現実という区分を前提とした南島イデオロギー論に議論を

[3] 遠近法の消失点が1つか複数かということは、社会進化論か文化相対主義かという問題と同じく本論の観点からはさほど重要ではない。いずれにしろ空間自体が不在の超越性によって支えられている図式自体が問題なのだ。

後戻りさせることである。重要なのはそれを部分イデオロギーとして捉え直す[4]、より広範な（あるいはより深い）枠組みを作ることである。

3. 神も、信仰も、法も持たぬ人びと

ここで少し島から離れ、かつてヨーロッパ人が「神も、信仰も、法も持たない」と形容した野蛮人ちゅうの野蛮人たる新大陸のインディアンたちの世界を覗いてみることにする。

● 秩序としての戦争（P・クラストル）

トゥピ族を中心とした南米低地のインディアンたちは、絶え間ない部族間戦争と食人実践をヨーロッパ人の新大陸到来以前から続けていた。自らの栄誉のために敵の頭皮を求め続ける戦士たちのなかでは、集団の首長も神聖王のような絶対的な権力を持つものではなく、せいぜい「いちばん演説がうまい人」「いちばん強い戦士」くらいの相対的な偉さにとどまる。

人類学者ピエール・クラストルは、これら南米低地先住民へのフィールドワークと西欧的理性へのラディカルな哲学的反省から、これらインディアン諸社会を集権化された社会機構を持たず、国家という「一」なるものに抗し続ける「国家に抗する社会」という概念で特徴づけた。

果てしなく続く「万人の万人に対する戦い」。だが、それはかつての西欧理性が考えたような社会契約という「一」なる法が導入される以前の完全なる無秩序[5]ではなく、戦争という離散性と姻族関係という連続性[6]の2つのモメントをどちらも含み込み、決して国家という超越的な連続性には解消され得ない[7]異質な秩序を持った社会であった。

● 他者に〈なる〉こと（E・ヴィヴェイロス＝デ＝カストロ）

アマゾンの深いジャングルからもたらされたクラストルの思考は、南米インディアン諸社会、さらにはわれわれの生きるこの「社会」というもの一般についての深い洞察を与えてくれる。しかし、インディアンたちの共同体を永遠に結合と反発を繰り返す、それ自体は強固なモナドとして構想したクラストルの視角には問題が

---

[4] その意味で、トカラ列島のなかでも比較的ヒエラルキカルな性質を持つ宝島に、祭礼や社会構造といった研究が多いというのは留意しておいていいだろう。

[5] 社会システム論においても、観察者が観察対象に内属するという社会的なものの定義に従えば、自然科学的システム論における「エルゴード状態」のような客観的無秩序状態（あるいはシステムの未成立状態）の同定はできないとされる。

[6] クラストルの師でもあるC・レヴィ＝ストロースの交換論では、後者の姻族関係による結合作用の方に社会を成立させる性能があるとされていたが、クラストルはそれをひっくり返し（あるいはもう一つの面をさらけ出し）、戦争と交換はともに通常の交通形態であって、どちらも社会を成立させうると考えた。

さらにいえば、のちにレヴィ＝ストロース自身、全てを性的欲動およびその否定による社会状態の樹立という単一の形象へと還元するS・フロイトの神話解釈を批判し、神話というものの持つ根本的な複コード性を主張した。それは、『神話論理』における自然から文化への移行という認識論的主題の背景となっていた、自然をいかにして文化に生成するのかという存在論的主題の全面化でもある。

[7] しかし、この点はよく考えると疑問である。国家というものを、具体的な経験領域を超えて同一性を担保する超越的な存在として考えると、ここにも離散性と連続性の2つのモメントが見いだされるのではないか。逆に言えば「国家に抗する」社会の内側にも、つねに国家へと向かう性向、ドゥルーズ／ガタリのいう「原国家」のようなものが含まれているのではないか。

ないわけではない。

クラストルより 20 年ほど後の人類学者、エデュアルド・ヴィヴェイロス＝デ＝カストロは、南米低地に住むアラウェテ族のコスモロジー研究や、16 世紀ブラジルにおけるヨーロッパ人宣教師による先住民の記録を通じて、インディアンたちが自らの存在をどのようにして了解しているのかというより根本的な次元から、これらの社会の離散性と連続性について思考した。

インディアンの戦士にとって、彼の過去とは戦闘で敵を殺し、あるいは敵の人肉を食べたこと、つまり殺害／食人者としてのそれである。そして彼の未来とは、戦闘で敵に殺されるか、あるいは捕虜となって敵の村に連れ込まれ、そこで数年間養われた[8]のちに広場で公開処刑され食べられるという被殺害者／獲物としてのそれである。つまり、現に存在している彼自身は、殺害者であった過去から獲物となる未来の間で、つねに前者から後者へとなりつつある存在である。

現代のアラウェテ族では、戦争と食人の実践はコスモロジーの領域へと移行していた。アラウェテの創世神話では、かつて人と神は同じであったが、何らかのトラブルをきっかけとして世界は天と地の 2 つに分かれたと考えられる。つまり、神とは過去に人がそうであったものである。そして、人が死んで魂の半分が天上に昇ると、そこにいる神はそいつを殺して食べてしまう。そうして生まれ変わって初めて、死者は神々の一員となるのである。つまり、神とは人が未来になるものである。一方、魂のもう半分は地上をうろつく非人称的な「影」となり、原因不在の効果として生者の生活に様々な影響を及ぼす。それは、かつて人だったものの未来である。

生者とは、かつてそうであったもの（殺害者／「影」）とこれからそうなるもの（被殺害者／獲物）の間に生起する境界現象としてのそれである。そして、人はこれからそうなるものを、つまり現実的には天上世界や敵の村での死を追い求めるが、それはいつの間にか内側に、つまり自らへと影響を及ぼす不在の原因や、自らの起源へと（まるでクラインの壷のように）還流する。これらはすべて、他者を食べるという実践に含まれる、連続性（食べること／食べられることで他者になる）と離散性（しかし、私が食べる他者も私が食べられる他者も、どちらも私ではない）の徹底的な展開としてある[9]。

このような社会に西欧人のように強力な「敵」の位置を占めるものが到来した時、表層的な社会変動はきわめて容易に発生する。人々は喜びいさんで敵になろうとし、その服装や儀礼、さらには教義までも争って摂取する。だが、神の教えを受け入れ、食人や一夫多妻などの異教徒の蛮行をやめると約束した部族でも、たとえば一度酒が入ると戦士たちは過去の戦功を誇らしげに語り始め、あらゆる禁じられたことを思い出してしまう。

---

[8] この間にも彼は監禁されることなく自由に動き回り、あまつさえ敵の女と婚姻関係を結ぶ。後述するように敵とはまた神でもあり、捕虜という敵と婚姻関係を結ぶことは、神になるための行程でもある。

[9] ついでに言うと、神と人との間の離散的連続性ともいうべきコスモロジーを持った社会では、動物と人との関係もまた同様である。これをざっくり括ればアニミズムということになろうが、そこで強調される人間と動物の連続性という第 1 主題に隠れた、両者の離散性という第 2 主題を忘却した時、スピリチュアル（笑）な人たちのたわごとや教条的自然保護論者の馬鹿どもが出現する。

「もし、彼らが王さえ持っていたら、その王を改宗させるか殺して成り代わるかすれば、宣教なんてあっという間だったのに……」と宣教師たちが嘆息を込めて記しているように、彼ら彼女らは、個人の生を意味付ける超越的同一性としての神ではなく、自らをそれに近づけ、あるいはそれを自らに引き下ろしたくなる（ヨーロッパ人のなかにはインディアンと一緒になって一夫多妻や食人に耽る者までいた！）ようなすごいやつとしての神をそこに見いだしていたのである。

4. 再び島へ：いくつかの問題集を提示して

Manifesto トカラ列島を含めた南西弧の島々を、同一性の原理だけではなく非同一性（あるいは生成）の原理で記述すること。

- 海の存在論

  ～海上の秩序と陸上の秩序ははたして同じものか？

  ～海民たちの存在論は、陸上において形式化され、語り得るような儀礼や信仰体系において説明し尽くされるのか？　それに回収しきれないものとして海に関する実践系があるのではないか？

- 外への両義的態度

  ～島の信仰における海上他界の問題。さらには島民のコスモロジーについて。南アメリカ諸社会と比較した時どうか？

  ～遠島人による平島王権の樹立の試みはいかにして不首尾に終わったのか？　とくに、より南方の島々に分布する外来王伝説と比較したときにどうか？

  ～平家の神が出雲の神へと入れ替わる

  ～ヒッピーとヤマハ、2つのポスト近代の波頭の諏訪之瀬島での出会いとその後

  ～海賊になる／海賊に襲われる。三島村の海賊伝説・日高ヨスケ・1945年、「鬼畜米英」の到来・38度線密貿易の記録と記憶。島民が主体となって「通常の交通形態」のもう半分である戦争を行ったことはあったのか？

- グローバル・ヒストリーのなかの南西弧

  ～16世紀日本の産銀ブームとトカラ商人

  ～大陸や先島まで及ぶ交易活動（海禁体制後も継続）

  ～海禁体制下、虚構と実体が入り交じる「トカラ国」

  ～19 世紀、ジャパン・グラウンドに接触し始めたヨーロッパ船との接触。宝島の捕鯨船員射殺事件と、

三島村における英国人密貿易商館跡。

～不時着特攻機多発地帯としての奄美・トカラ

～米軍の世界戦略と主権の分割線

- 現代の島はいかにして社会たりえているのか

～互酬制（マグミ）の終焉と市場経済への依存。もはや財のやり取りを介したコミュニケーションが自明ではなくなったとき、島のただ中で生起する戦争状態。他者が単なる肉のかたまりにしか見えない（都市でわれわれが日々経験するような）事態が起きているのか？

～都市のなかのトカラ的ハビトゥス。トカラ移民が移住先で釣り舟に乗ると、なぜか出漁者全員で魚を均等に配分してしまう。